

で、恐らく中心文ではあるまい。③は、「ところで」という転換の接続詞に導かれ、「～長年にわたる調査の結果から、そのことが明らかになった」と、②の「人かけのたえた所では、スズメもやがてすがたを消すだろう」という予想が確かめられたというのであるから、③を中心文とするのが適当であろう。

ただし、③は指示語を含み、③だけでは「要点をまとめる」のに不十分なので、③の指示語の指示内容に当たる②の要点や、①の要点なども取り入れてまとめることが大切である。四の要点は「人家の数が変化すると、スズメの数も変化する」である。

### 例3 四五四五段落の内容の比較

X	Y
四 「人家の数」の変化によって→「スズメの数」が変化する。(結論)	
⋮	⋮
四五 「人家の戸数」がへってゆく→「スズメ」が一わもないなくなった。	】 四五 「新しい村落」が出来る →「スズメ」が集ってくる。】 〔具体例

四五段落の「要点をまとめる」のは、例1、例2と比べると非常に難しい。それは、四五ともに解説・説明・例示の文が並んでいるだけで、中心文らしい文が見当たらないためである。しかし、四五の内容に四の内容と対応させ図示してみると、四五の「要点をまとめる」ことは、比較的容易となろう。

すなわち、四は、「X『人家の数』の変化によって、Y『スズメの数』が変化する」という結論であるのに対し、四五はその具体例であるから、四五では、「Xに相当する『人家の戸数』がへってゆくので、Y『スズメの数』が一わもないなくなった」という関係がとらえられ、同様に四五でも、「X『新しい村落』が出来ると、Y『スズメ』がどこからともなく集まつてくる」ととらえることができる。このような段落相互の関係が分かると、児童たちも容易に「要点をまとめる」ことができるだろう。四五の要点は、「人家がなくなった村落には、スズメがいなくなる」であり、四是、「新しく出来た村落にはスズメが集つてくる」となる。例1、2、3の検討から、「要点をまとめる」といってもけして一様ではないことが分かった。したがって、児童・生徒にはさまざまなタイプの文章で練習させることが必要であろう。

### 4 小見出しをつける

次に紹介するのは、小学校国語講座の一コマで、新採用の先生と経験者の先生との対話である。

問い合わせ 「小見出しをつける」ときは、どんなことに注意すればよいですか。

答え 各段落の中心文・中心語句を見付け、それらを中心にまとめらいいでしよう。

問い合わせ では、四五段落の中心文は④だから、「スズメは人家付近にしか住まない」ですか。

答え 「小見出し」ですから、それらしく文末は、体言止めにしてはどうでしょう。

問い合わせ はい。「人家付近に住むスズメ」ではいかがですか。

答え ええ。しかし、「人家付近にしか」の「しか」を落としてはいけないと思います。

問い合わせ そうですか。「しか」は、「しか……ない」という呼応関係だからでしょうか。

答え そうです。それに、四五の④は、四五の中心文②「スズメは文字どおり『いたる所』に住んでいるのであろうか」の問題提起に対する答で、「～しか」は、四五の②の「いたる所」と響き合い、「いたる所に住んでいるか」——「人家付近にしか住んでいない」という重要な意味を添えるので、どうしても落とせないと思います。

問い合わせ すると、「人家付近にしか住まないスズメ」ではどうでしょう。

答え たいへんいいと思います。

以上の対話でも分かるように、「小見出しをつける」際には、次のような点に留意したい。

ア 各段落の中心文・中心語句を見付け、それを中心にまとめる。

イ できるだけ端的な表現にするため、全体で、5字～10字、長くとも15字程度が望ましい。

ウ 文末表現は、原則として体言止めが望ましい。

エ 中心文だけでなく、その段落の文と文との連接関係も十分考慮する必要がある。

オ 「小見出しをつける」段落だけでなく、その段落と他の段落との関係、その段落と文章全体との関係についても十分考慮する必要がある。

### 5 おわりに

「中心文を見付ける」、「要点をまとめる」、「小見出しをつける」などの説明的文章読解の基礎的な技能について、できるだけ具体的に例文に即して、問題点を考えてきた。なお「段落」、「主題」、「意図」、「論述の態度」等にもふれたかったが、紙幅の都合で割愛した。いずれ機会を改めて述べてみたい。